

第 25 回全国棚田（千枚田）サミット 実施報告書

【概要版】

令和 2 年 3 月

第 25 回全国棚田（千枚田）サミット 実施報告

- 1 開催日程 令和元年 10 月 13 日（日）～10 月 14 日（月）
- 2 開催地 山口県長門市 【中国地方初開催】
- 3 参加者 582 人（来賓・スタッフ別）
- 4 主催 全国棚田（千枚田）連絡協議会
- 5 主管 第 25 回全国棚田（千枚田）サミット長門市実行委員会
- 6 テーマ 棚田の魅力を再発見！ ～美しいふるさとを未来へ～
- 7 スケジュール

（1）令和元年 10 月 13 日（日）

時間	内容	場所
09：30～	オープニング（油谷こどもミュージカル）	ルネッサながと 劇場
10：00～	開会式典	ルネッサながと 劇場
10：30～	事例発表（山口県立大学国際文化学部）	ルネッサながと 劇場
10：50～	行政報告（農林水産省農村振興局）	ルネッサながと 劇場
11：00～	基調講演（明治大学農学部小田切徳美教授）	ルネッサながと 劇場
12：00～	昼食・休憩・移動	ルネッサながと アリーナ
13：00～	第 1 分科会 棚田を守る多様な「担い手」	ルネッサながと アリーナ
	第 2 分科会 棚田を核とした地域振興	ルネッサながと 軽運動室
	第 3 分科会 地域の誇り棚田の「再生」	長門市立図書館 視聴覚室
15：00～	農ガールコレクション	ルネッサながと 劇場
18：30～	全体交流会	ホテル西京 コンベンションホール

（2）令和元年 10 月 14 日（月）

時間	内容	場所
07：30～	現地見学会 2 コース 観光エクスカーション 3 コース	現地見学会 ・ 東後畑の棚田コース ・ 本郷の棚田コース 観光エクスカーション ・ 元乃隅神社コース ・ 青海島陸路コース ・ 青海島海路コース
11：30～	閉会式典	ルネッサながと 劇場

- 8 宿泊場所 長門市内の宿泊施設 等

- 9 参加費用 (1) サミット参加料 3,000 円／人
 (2) 全体交流会費 5,000 円／人 ※希望者のみ
 (3) 現地見学会等参加料 1,000 円～2,000 円／人 ※希望者のみ

- 10 交通手段 山口宇部空港・J R 新山口駅と会場を結ぶ無料送迎バスを限定運行
 長門市内の移動は無料シャトルバスを計画運行

11 開閉会式典

項目	内容等	備考
開会式	主催者あいさつ	中村 義明 長野県小谷村長
	開催地あいさつ	大西 倉雄 山口県長門市市長
	開催県知事あいさつ	弘中 勝久 山口県副知事 (村岡 嗣政 山口県知事代理)
	来賓祝辞	安倍 昭恵 内閣総理大臣夫人 牧元 幸司 農林水産省農村振興局長 (江藤 拓 農林水産大臣代理) 鶴保 庸介 参議院議員 (棚田振興議員連盟会長) 林 芳正 参議院議員 (地元選出国會議員)
閉会式	共同宣言	上田 和幸 (長門市新規就農者)
	次期開催地あいさつ	越後 亨 山形県大蔵村産業振興課長 (加藤 正美 大蔵村長代理)
	協議会旗引継ぎ	大西 倉雄 山口県長門市市長 越後 亨 山形県大蔵村産業振興課長
	御礼のあいさつ	大西 倉雄 山口県長門市市長

12 オープニング

小学4年生～中学3年生の団員29名で構成される地元の「油谷こどもミュージカル」がオープニングミュージカル(全国棚田サミット限定のオリジナルミュージカル)を披露。

13 事例発表

- (1) 演 題 東後畑の棚田ブランディングとm o m p e k k o開発の7年
 (2) 発表者 山口県立大学大学院2年 企画デザイン研究室 下川まつゑ氏
 (3) 内 容 平成25年より山口県立大学国際文化学部が中心になり取り組んでいる長門市油谷宇津賀地区のブランディング研究の成果(若者や

女性などの層に、新たな農業スタイルを提案し、農業に対するイメージアップを図るための農作業着ファッションショーの実施や棚田米パッケージデザイン制作等の取組み）を発表。

14 行政報告

- (1) 演 題 棚田カード・棚田女子プロジェクト
- (2) 発表者 棚田カードプロジェクト：上原加奈子氏、久保京子氏、本間勝考氏
棚田女子プロジェクト：井上脩子氏
- (3) 内 容 農林水産省と府県担当者を構成員とし、棚田カードによる棚田地域活性化を目指す棚田カードプロジェクト及び農林水産省の有志の女性職員を構成員とし、新たな経済的価値を地域に取り込むための方策を検討することにより、棚田を次世代に継承する運動の展開を目指す棚田女子プロジェクトの取組みを発表。

15 基調講演

- (1) 演 題 関係人口と農山村再生 ～新しい「地方創生」へ～
- (2) 講 師 明治大学農学部 小田切徳美 教授
- (3) 内 容 「関係人口」に着目し、地域外の人材と地域住民との関わりを深化・持続させることによる農山村再生の方策等について講演。

16 分科会

項目		内容等
第1分科会	テーマ等	【テーマ】 ～棚田を守る多様な「担い手」～ この分科会では、担い手不足に悩む中山間地域の課題解決のため、地域の外に住みながら地域や地域の人達と関わり合う「関係人口」等に着目し、地域外からの交流・支援の入口を増やす取組み等について議論。
	キャスト	【コーディネーター】明治大学農学部教授 小田切 徳美 氏 【パネリスト】①棚田清流の会代表 佐伯 伴章 氏 ②農事組合法人植柳ファーム副代表理事 柴岡 寛瑛 氏 ③株式会社百姓庵代表 井上 雄然 氏
	要約	地域住民発意で地域の将来像を描き、それを実行に移すことで地域コミュニティの再構築と併せて棚田地域の魅力創出へ繋げ、人を呼び込む取組みを加速化させることが必要。
第2分科会	テーマ等	【テーマ】 ～棚田を核とした地域振興～ この分科会では、農業だけではなく、歴史、文化、景観、環境等様々な視点から中山間地域を見つめ直し「モノづくり」や「コト起こし」を通じて、地域のファンを増やし地域振興に繋がる取組み等について議論。

	キャスト	【コーディネーター】 山口大学経済学部教授 内田 恭彦 氏 【パネリスト】 ①内閣府地方創生推進事務局参事官 遠藤 順也 氏 ②株式会社 ARCHIS 代表 松浦 奈津子 氏 ③特定NPO 法人ゆや棚田景観保存会代表 大田 寛治 氏
	要約	地域産品の高付加価値化のためには、入口（生産）～出口（販売）までのトータル戦術・戦略が必要。棚田をビジネスの視点で捉え、新たなビジネスの創出含め中山間地経済の好循環化を目指す取り組みが必要。
第3分科会	テーマ等	【テーマ】 ～地域の誇り棚田の「再生」～ この分科会では、荒廃が進む棚田の保全意義について再認識し、様々な地域で取り組む保全活動を共有すると共に、国等の補助制度を有効活用しながら遺産的農地を永続的に後世へ伝えるための方策等について議論。
	キャスト	【コーディネーター】 九州大学名誉教授 小川 全夫 氏 【パネリスト】 ①農水省中山間地域・日本型直接支払室長 荻野憲一 氏 ②一般社団法人上山集楽代表 西口 和雄 氏 ③本郷集落協定代表 大汐 光晴 氏
	要約	耕作放棄の抑制には、農地を米だけでなく多様な形で活用する可能性を検討することが必要。また、移住就農者や海外人材の登用、家畜の導入含め地理的特性を生かした各々の自主的な取り組みの加速化も必要。

17 農ガールコレクション

山口県立大学が中心となり企画・運営。若者が着て農業をしたくなるようなお洒落な農作業着を開発し、若者や女性などの層に、新たな農業スタイルを提案することで農業に対するイメージアップを図る取り組みとしてファッションショーを実施。

18 全体交流会

- 歓迎挨拶・・・・・・・・・・大西 倉雄山口県長門市長、村岡 嗣政山口県知事
- 来賓挨拶・・・・・・・・・・宮崎 雅夫参議院議員
- 乾杯・・・・・・・・・・牧元 幸司農林水産省農村振興局長
- アトラクション・・・・・・・・和太鼓演奏、棚田数え唄（寸劇）
- 次期開催地挨拶・・・・・・・・越後 亨 山形県大蔵村産業振興課長

19 現地見学会・観光エクスカーション

内容等
現地見学会1 日本の棚田百選「東後畑の棚田」 現地おもてなし：NPO法人ゆや棚田景観保存会、宇津賀まちづくり協議会
現地見学会2 水田放牧による営農「本郷の棚田」 現地おもてなし：本郷集落協定、むかつく地域協議会

観光エクスカーショ ン 1 青海島・島旅陸路コース ～青海島の自然と古式捕鯨の里をめぐる～
観光エクスカーショ ン 2 元乃隅神社・絶景満喫コース ～圧巻のロケーション絶景パワースポット～
観光エクスカーショ ン 3 青海島・島旅海上コース ～クルーズ船で自然の造形美を間近に～

20 実施状況写真



会場内の様子（展示スペース）



会場内の様子（展示スペース）



オープニングアトラクション



開会式典の様子



中村 義明 全国棚田連絡協議会長 挨拶



大西 倉雄 山口県長門市長 挨拶



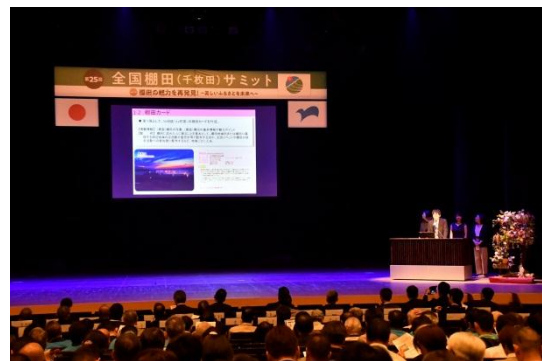
弘中 勝久 山口県副知事 挨拶



来賓



事例発表（山口県立大学）



行政報告（農林水産省農村振興局）



基調講演（小田切 徳美教授）



基調講演（小田切 徳美教授）



分科会の様子



分科会の様子



農ガールコレクション



農ガールコレクション



全体交流会の様子



全体交流会の様子



現地見学会（東後畑の棚田）



現地見学会（本郷の棚田）



閉会式の様子（協議会旗引継）



閉会式の様子（次期開催地挨拶）

21 開催成果

令和元年10月13日（日）～10月14日（月）の間、開催された第25回全国棚田（千枚田）サミットの成果について検証し、以下のとおり整理した。

1) サミットでの議論について

（1）新たな人材の確保・育成について（第1分科会で議論）

ア) ディスカッションの視点

担い手不足に悩む中山間地域の課題解決のため、地域の外に住みながら地域や地域の人たちと関わり合う「関係人口」に着目し、地域外からの交流・支援を増やす取組について議論。

イ) ディスカッションでの主な意見（パネリスト等の発言から抜粋）

- ① 高齢者でも障害者でも外国人でもお互い尊重しながら多様な担い手が活躍できる場を提供することが重要。
- ② 山口県農業大学校は、全国的に見ても法人就業率が非常に高い。この特徴を生かした担い手確保策も検討すべき。
- ③ 地域内の高齢化が顕著であり、荒廃が進む棚田を維持するため交流の機会を増加し外部の人が地域に関わる機会を提供すべき。
- ④ 平場では法人化が進んでおり、同様の取り組みを中山間地でも推進し、法人設立を契機にした地域コミュニティの構築も重要。
- ⑤ 人口の社会増には女性に対してオープンかどうか、女性の活躍の場があるかどうか重要な要素になる。

ウ) 議論のまとめ

新たな人材の確保について、地域住民・農家・地縁組織・行政がより一層連携し受入体制含め環境整備が必要。また、地域住民発意で地域の将来像を描き、それを実行に移すことで地域コミュニティの再構築と併せて棚田地域の魅力創出へ繋げ、人を呼び込む取組みを加速化させることが必要。

（2）棚田地域の活性化（魅力度向上）について（第2分科会で議論）

ア) ディスカッションの視点

農業だけではなく、歴史、文化、景観、環境などの視点から中山間地域を見つめ直し、「モノづくり」や「コト起こし」を通じてファンを増やし、地域振興につながる取組などについて議論。

イ) ディスカッションでの主な意見（パネリスト等の発言から抜粋）

- ① 農業は先行投資型であり作物が育って初めてお金に変わる。形態を替え資金が回る仕組みにしなければ持続可能な農業は困難。
- ② 地域ブランド力向上のためには、棚田で作られる商品の高付加価値化と併せて販路開拓（流通改革）が必須。棚田を農業生産の場で考えた場合、付加価値を高めなければビジネスとして成立しない。それを中間マージンを削って財力のある

者に売る仕組みが必要。

- ③ 欧州では農村景観を守るため景観条例を設けて綺麗な景観を維持している。綺麗な環境の中で地域の特色ある産品を味わう「アグリツーリズム」が定着している。今後はこのようなツーリズム化がポイントになる。
- ④ 情報発信の方法は従来とは異なり、今の若年層は SNS や youtube 等で繋がっている。情報発信の方法も検討すべき。

ウ) 議論のまとめ

地域産品の高付加価値化のためには、入口（生産）～出口（販売）までのトータル戦術・戦略が必要。棚田をビジネスの視点で捉え、新たなビジネスの創出含め中山間地経済の好循環化を目指す取り組みが必要。

(3) 耕作放棄の抑制について（第3分科会で議論）

ア) ディスカッションの視点

荒廃が進む棚田の保全意義を再認識し、地域で取り組む保全活動を共有するとともに、国などの補助制度を有効活用しながら遺産的農地を永続的に後世へ伝えるための方策などについて議論。

イ) ディスカッションでの主な意見（パネリスト等の発言から抜粋）

- ① 地元住民が自分たちの土地をどのように守るかを自分達で考えながらそれを実行することが重要ではないか。
- ② 棚田は法面管理が重要であるが、先進技術を導入するにもそれを操作できるオペレーターの育成が必要。
- ③ 企業が CSR（社会貢献活動）の一環として棚田に投資（人的・経済的）してもらう仕組み作りも検討すべきではないか。
- ④ 日本は今、人手不足が深刻であるが、外国人労働者がその問題解決に繋がるのではないか。※岡山県美作市ではバングラデシュ人を複数名雇用
- ⑤ 自然災害が営農意欲を削ぎ、営農への諦めに繋がり耕作放棄になっている事例が全国的に問題になっている。
- ⑥ 現状の鳥獣害は災害と同程度の認識であり、これからどのように獣害に立ち向かっていくのか積極的に議論する必要がある。

ウ) 議論のまとめ

耕作放棄の抑制には、農地を米だけでなく、多様な形で活用する可能性を検討する必要がある。また、移住就農者や海外人材の登用、家畜の導入含め地理的特性を生かした各々の自主的な取り組みを加速化させることが必要。

2) 主な成果

- (1) サミットに係る周知イベントの開催や積極的な広報活動により地元の重要な農業遺産である「棚田」に対する地域住民の意識変容を促せた。
- (2) 地元団体を中心に積極的な景観維持や現地見学コース等の環境整備に努めたこと

により棚田の保全管理、耕作放棄地の発生防止に対する保全意識の向上が図れた。

(3) サミット開催に当たり、テーマの募集や各種アトラクション等で児童・学生が参画したことにより地域の将来を担う子供たちが郷土の自然資源を再認識・再評価するきっかけに繋がった。

(4) サミット開催をきっかけとして、農業者・棚田保全団体・観光団体及び商業者が連携し、棚田米等の生産物を使用した新商品の開発・販売に繋がり、棚田生産物の価値向上の取組みが促せた。

3) 今後への期待

(1) 成果の発展

地域住民の棚田を保全しなければいけないという意識が高まることで、積極的、自発的な保全活動の取組みが活発化し、その取組みが拡大することで耕作放棄の発生防止や景観の維持が期待される。

(2) 次世代への継承

サミット開催を契機として、棚田を教育フィールド化するなど次世代へのアプローチを積極的に行い、ふるさと教育を施すことで、次世代への継承及び新たな担い手の確保・育成が期待される。

(3) 戦略的・効果的な情報発信

サミットでは全国から多くの農業者が参集し、山口県内の棚田地域はもとより全国の棚田地域間で活発な情報共有・意見交換等が行われたことにより、地域課題解決の一助となるネットワークの構築が期待される。

そして、サミット開催で本市の棚田が全国発信され知名度が向上したことから、食や観光産業と連携した誘客の取組みを一層推進することで、人と事業を呼び込み更なる関係人口増に繋がることが期待される。

4) サミット開催のまとめ

棚田地域振興法の成立後、初開催となった第25回全国棚田（千枚田）サミットでは全国から多くの農業者、行政関係者や地域おこしに興味・関心のある方々が参集し、今後の棚田保全の在り方や棚田地域の振興策等について熱い議論が交わされ、盛会のうちに幕を閉じた。

新たな人材の確保・育成など、効果が現れるには時間がかかる部分があるものの、継続して保全活動等に取り組むことで今後の発展に繋げ、このサミット開催の効果を広く市内（山口県内）全体に波及させていく必要がある。棚田地域振興法の成立後初めてとなるこのサミットの記憶を風化させることなく、引き続き棚田保全活動にしっかりと取組み、このサミット開催を将来へのモメンタム（推進力）とし、終点ではなく、地域を変える出発点に繋げていくことが重要となる。